

>> 6/23に、SAP参画の4NPOの主催による「新世界アーツパーク未来計画シンポジウム」が開催されました。三部で構成され、3時間半に及びましたが、最後まで熱気があふれていました。今回の **SAP-Tourism*** では、SAPや大阪のみならず、芸術環境そのものに対し意義深い発言の多く飛び出たこのシンポジウムの様子を、トーカー（＝出演者）の象徴的な発言をピックアップしたダイジェスト版としてご紹介します。

第一部 SAP事業説明と4NPO活動紹介

>> 第一部では、SAPの成立経緯と位置づけについての説明と、4NPOの活動紹介が行なわれました。（*SAPの概要については、本紙背表紙をご覧ください）



司会 (remo甲斐)：これまでの流れの中、(SAPの成果や抱えている問題というのは)日本規模で大きく共有できる問題なのではないかという意見がありました。だったら、開いてしまおう。できる限りオープンにしてみなさんに知っていただいて、この問題に関しての考え、情報を共有する機会をつくらうということで、今回4NPOの発案として、このシンポジウムを行うこととなりました。

cocoroom上田：私は、詩というのは言葉であると考えます。言葉であるというのは、生きる姿勢であり、態度であり、他者に向き合うか、社会に向き合っていくのかということを示明していくことにほかならないと思っています。ですから、このNPO法人では、言葉というものを通して、考えていく態度として、表現と社会を自分の問題として開いていく人が集まることで、この機能を果たしていると思っています。また、地域との関わりも深くなった今、途中で投げ出しにくいのが正直なところです。

dB大谷：舞台芸術、ダンスでも演劇でもそうなんですけれども、芸術の享受のあり方が近年変わってきたなと思っています。いわゆる鑑賞型の芸術の享受のあり方だけではなくて、参加型の、ワークショップに代表されるように、芸術の享受のありようというのが非常に多様になってきています。これは、ダンスのもつクリエイティブな創造力、あるいはイマジネーションという意味の想像力、からだを使ったコミュニケーションの力などが、ワークショップのなかで活かされていると思います。

remo雨森：現在、ピエンナーレやトリエンナーレなどの大きな国際展でも、映像の作品が大半を占めるという状況になっております。また、欧米では70年代頃から、メディアセンターが設立されたり、フェスティバルが継続して開催されていたりと、日本に比べると質の高い作品が生まれる環境整備が来ています。そういう状況を日本でも作っていく必要があるのではないかと、remoを立ち上げたわけです。（以下、remo甲斐による補足）今、映像には暗黙知という言葉で表現される、言語化しえない知識というものが入っているのではないかとされています。ぼくたちが何年後かに、どう扱ってかわからないんですけど、これはただ受け取るだけでなく、発信する人たち、もうツールは90年代以降コンピュータで質も高いし誰でもやれるわけです。そういうところで発信者というものを増やしていかないと、たぶんこの知というのはみんなと交換できないのではないかとという問題意識が動いています。この動きというのは欧米で若干あります。始まったばかりです。

Bi西川：即興演奏とか前衛音楽って難しい、眉をひそめる感じってあるじゃないですか。じっさい触れてみるとそういうのではなくて、個人のもつパワーみたいなものをどだけ音に変換できるか、みたいなところがあって。欧米では即興演奏があれだけ認知されていて、だからビョンドイノセンスに関わってるミュージシャンも、海外ではある程度認知されていたり、賞をとったりしているんですけど、日本に帰ってきたとたんに何もなくなるんですね。日本にもそういうのを根付かせたいし、それと同時に国際的にも…ね。こういう感じを目指しているわけです。

第二部 ゲストトーカーによるおはなし

司会 (remo甲斐)：(SAPのような)動きが、世の中的にどういう位置にあるのか、そのもの自体が都市というものを考えたときにどう起こってきたものなのか、もう少し視野の広い視点で先生方に語っていただこうというのが、この第二部です。



佐々木雅幸 「騒々しい都市が、創造都市になる」

>> トップバッターは、大阪市立大学の佐々木雅幸教授です。創造都市論がご専門とあって、世界のさまざまな事例の紹介を、まるで地図の上を疾走するかのごとくたくさん紹介してくださいました。

■ バイオテクノロジーやハイテク産業などに日本は力を入れるべきだ、とよく言われていますが、そのためには創造的な人材が必要です。私は、芸術の創造性と科学技術の創造性はお互いに刺激し合う、シナジー効果があると考えています。同じようなことを言っている研究者がアメリカにいて、リチャード・フロリダという人です。（中略）そういう人々（＝アーティスト）が集まる所にはハイテク産業で働いている人々も集まってくるということを、統計的に分析し説明したわけです。今、フロリダ氏の理論が世界でもはやされていますが、彼は、こういうハイテク産業や芸術分野で創造的な仕事をする人たちを総称して、「創造階級」と呼んでいます。そして、創造階級が増えていく都市こそ21世紀型だと言っています。

■ ポローニャがミレニアムの2000年に取り組んだ「ポローニャ2000」という文化イベントがあります。若い世代の市民の積極的な参加を目指すとともに、文化消費だけではなくて、今日のシンポジウムのテーマでもある「文化の生産と創造的発展」を目標にしたものでした。つまり出来合いの文化を消費するだけではなくて、新しいものをつくっていくというところにポイントがあります。そうしてはじめて、大阪が言っているような文化集客につながるわけで、（中略）大阪の中にある本来の資源を活かしながら現代アートや文化を生み出すことが重要で、そういうことに取り組んでいる都市の方が成功していると言いたいわけです。

吉本光宏 「SAPはひとりじゃないよ、世界各国で同じようなことをやっている所はいっぱいあります」

>> ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 室長として、全国各地の文化事業に関わっていらっしゃる吉本光宏さん。当日は、EU圏のアートスペース視察から戻ったその日ということで、見てこられたばかりの事例をたくさん紹介してくださいました。

■ 今回、フランスでは、工場ばかり、工場跡、廃屋ばかり見て来ました。おそらく日本人のツアーで、美術館じゃなくて工場ばかり見た集団はほくらが初めてじゃないかと思うんですけど（笑）。行く先行く先ですべて、そこを選んでいるわけですけども、余った建物をアートスペースに改修するというのが当たり前というか、むしろそれ以外の方法は考えられないというくらいに、フランスではこういうことが定着している。

■ この場所のこの雰囲気っていうのが、フランスで見えてきたこの怪しい、このどういえばいいんだろう、この新世界のエリアもそうだし、ゆるゆるした、怪しいものから新しいものが生まれてくる、そういう雰囲気非常に持ったエリアで、それは決してこのフェスティバルゲートだけではなく、ヨーロッパでは日常茶飯に起こっていて、当然そういう場所はマルセイユもリールも市が大々的に支援しています。

小暮宣雄 「難問まで含めてやろうじゃないかというのが、アクションプランの考え方でした」

>> 京都橋大学の小暮宣雄教授は、自治省でのご経験から、また「大阪市文化施策振興のための懇話会」の座長として、大阪の文化事業に関わっているお立場から、「芸術文化アクションプラン」の成立当初の理念と、自治体での文化行政について語ってくださいました。

■ 大阪市での芸術予算が一番少ないというのが有名でした。今もそうだと思います。逆に言うと、予算がかかるのはハードウェアですので、ハードウェアがないというのが強みでありまして、そういうもののがらみがないということですね。で、アクションプラン

の話を手短かに言っちゃうと、そういう予算が少ないというなかで一番効果的に使うのは、ソフトウェアとヒューマンウェアに注力したらいいんじゃないか、というのが一番始めに考えたことです。

鷺田清一 「生き方を変える、あるいは別の生き方の可能性にちらっと触れられるのではないかと、私たちはアートの世界に近づいていく」

>> 最後に、大阪大学副学長の鷺田清一教授は、ご専門が哲学ということもあり、とてもあたたかな語調で、SAPの活動へエールを送ってくださいました。

■ もうすでに「お金がない」ということと、仕組みがたっぷりできる時間と場所があるっていうことが、実はここ(SAP)の特徴でもあるんですけど、お金がないっていうのはいいことであって、大阪市の文化事業において全国からいろんな視察に来られるような注目を浴びているというのは、何度も出てきた公設民営だからだと思います。つまり家賃光熱費は提供するけれども運営に市は関与しない、民間でNPOを中心にやっていただくという、プロデュース自体を任せてしまうということですね。こういう形がとれたということが、つまり最低限のお金でやるということが、逆に今のアートとNPOの関係のあり方というのを大きく変えてしまっって、先進的な事業として逆に脚光を浴び

るようになったというのは、お金がないゆえの僥倖だったと思います。■ この場所をわかりやすく表現するために、最近気に入っている青木淳さんという建築家の言葉を引きます。（中略）「原っぱと遊園地」という本があるんですね。遊園地と原っぱの対比をしていて、この場所、フェスティバルゲートは、遊園地もあるけど完全に原っぱだというのがぼくの考えなんです。定義によると、遊園地と原っぱの違いは何かというと、遊園地っていうのは、あらかじめそこで行われることがわかっている空間。原っぱっていうのは、これは素敵な定義なんですけど、そこでおこなわれることが、空間の中味をつくっていくような空間なんです。

第三部 みんなでおはなし



cocoroom飯島：(第二部では)とても新世界というところと似ているなあという事例がたくさんあって。あ、そうか、ここはある種歴史の必然というか、ここびったりなんやなと思って。

司会 (remo甲斐)：文化にとっては経済というのは欠くことができないんですけど、経済からみた文化は、どうも余暇、プラスα、趣味というところに陥っていく。本来はなくてもいいっていうロジックがそこに太くあるわけですね。でもぼくらはそうではないと思っている。文化というのは欠くべからざるものであると思って動いているのが現場だと思っています。

吉本：「文化に経済は必要だけど、経済にとって必ずしも文化は必要ではないかもしれない」というのは、文化と経済が横に並んでいるからそうなるのであって、経済より前に文化は必要なんだと思うんです。



(中略) 最初に、べつに経済に連連することなくて、経済より先に、人間が人間としているためにアートが必要なんだろうというくらいのこと考えないと、いつも片隅で小さくなる必要はないなあと思います。

鷺田：都市における文化のレベルって、ネットワークの交点に誰がいるか、どんなかっこいい場所があるか、そこでほとんど決まってくるように思います。

佐々木：最近(中略)先進国の消費者は価格が安いという理由だけで商品を買いません。個人的で職人的な風合いのある商品を買います。経済的価値以外の、文化的価値のあるものがないと考える消費者がいるということです。（中略）文化や芸術の豊かな都市のほうが、品質の高い先端的な商品を生み出す可能性が高い。今までは、道路が広くて交通網が発達している都市がいい、ハード面を整備するべきだ、それが社会のインフラだと考えられてきましたが、これからはそれぞれの都市にある、文化的な創造力が社会のインフラになる。

cocoroom飯島：われわれアートNPOに求められているものってのは、結局のところ経済的な効果なのでしょうか。経済的なところ、お金も大事だと思うし、それ以外のソフトウェアのところでの人のつながり合いということの仕事をしていると思うんですけど、それを測る尺度として、やはり経済的な尺度というのは欠かせないものなんでしょうかね。

佐々木：NPOが今もはやされている理由は、パブリック(行政)とプライベート(市場経済)だけでは社会がうまく機能しない段階に入ってしまったからです。この2つだけでうまくいならNPOは必要ない。今、行政は財政危機に陥っているし、大企業はどんどん海外へ進出していますね。（中略）そこでNPOという、いわゆる民間の組織だけれど公共的な使命をもって活動するという領域に頼らざるをえない。この社会が病んでいて閉塞状態だからなんです。世界的に見ても、パブリックでもプライベートでもない中間の団体であるNPOが、環境や文化や福祉など、あらゆる分野で活躍している状態です。

鷺田：人材育成の目的、市民をもっともっとひとりひとりパワフルにする、基礎体力をつける、そのいい場、チャンスが、こういうNPOだと思うんですね。（中略）

そういう意味じゃダンスにしろ演劇にしろ音楽にしろ、今の文化事業、アクションプランでやっているなかで、明らかに、別にアートには関係ないけど、なんとなく面白そうだなにか自分でもできること、関わることもあるんじゃないかと、なんかふわっと通っているうちに、知らないあいだにここにべったりしてるとおもしろいということで、だんだんスタッフの側に入って。そのときには会社のしがらみとか地縁とか何もなくて、ひとりの個人として、ふっと自分の場所を見つけて、つくる側に回っている。そういう成長が、ぱっと来た人に対しても起こる。そういう広い意味での人材育成、将来原っぱでリーダーとして一流スタッフとして何かことを起こすことができる、担うことができる人を育てる場として、アートというのは肩肘を張らずに、でも実質のあるすごい場になって思ってます。だからみんなを誘惑してほしいと(会場笑)。

小暮：アクションプランをつくるときに、佐々木さんもおっしゃったように、芸術はもともとアールスだった。「術」であった。でその術ってのは少数の人が見つけたものですよ。それは魔術であったり、技術であったりいろんなものだったりするんですけど、それを、市場経済ではできないから行政がやるんだと、それは行政である価値ですよ。学術というのは、すぐにお金を生まないけども必要だから市立大学をつくらっている。産業的な技術も、すぐにお金になるなら民間企業がします。大阪の企業さんに役立つかもしれないけれども、まだ無理なものは大



阪市がやる。だから技術研究所とかありますよね。同じ「術」で、一番古くからあった芸術だけなんでやんないの?と思う。芸術という種を今から育てなきゃ仕方ないでしょう。いつもほってたらやせ細っちゃうわけ。ということとでやるというのが一番始めみんな考えていた論理だったんです。なんで行政がやるかっていうのは、それは市場がやらないから、という、当たり前のことをもう一回当たり前に言いたいなと思いました。

【4NPOトーカー】
remo甲斐＝甲斐賢治、NPO法人remo / 記録と表現とメディアのための組織 代表理事。芸術文化に関する情報デザインが専門。

cocoroom上田＝上田假奈代、NPO法人cocoroom / こえとことばとこころの部屋 代表理事。闘う詩人。

remo雨森＝雨森信、NPO法人remo / 記録と表現とメディアのための組織 副代表理事。インディペンデントキュレーター。

dB大谷＝大谷煥、NPO法人ダンスボックス 代表理事。プロデューサー、コーディネーター。

Bi西川＝西川文章、NPO法人ビョンドイノセンス 副代表理事。ミュージシャン、エンジニア。

cocoroom飯島＝飯島秀司、NPO法人cocoroom / こえとことばとこころの部屋 副代表理事。ミュージシャン。

>> 現場では、「アートは社会にとって必要不可欠なもの」として活動しています。SAPにはアーティストの来訪はもちろん、視察の方も切れ間なく来られます。そのことが必要とされている何よりの証なのではないでしょうか？